

（いや、僕は僕のもので臨也さんのものって訳じゃないんだけど）

彼に惹かれているのは事実だが、それとこれとは話が違  
う気がする。けれど今はやはり言わない方が良い。そう判  
断し、代わりに別の言葉を口にした。

「どうして静雄さんに逢ったってわかったんですか？」

「君からシズちゃんの残り香がする。すっごい不愉快」

告げる臨也は心底嫌そうだ。本気で不愉快であるらしい。  
残り香、ということは静雄の香水の香りがする、というこ  
とだろうか。

近づいてあれだけ頭を撫でられるまで、静雄が香水を使  
っていることなど帝人自身は気づきもしなかった。そのく  
らいささやかな香りだったのだから、たとえ帝人に移った  
としてもさらにささやかなそれだろう。だと言うのに、逢  
った瞬間にそれが静雄の香水だ、と理解するあたり、いつ  
たいこの人の嗅覚はどうなっているのだろうか、と本気で  
思う。

嫌そうな表情を浮かべたまま、さらに臨也は口を開いた。  
どうやら帝人の考えていることが想像ついたらしい。

「嫌いすぎてわかつちゃうんだよ。それより、こつち来て」  
ぐい、とやや強引に腕を引き、連れて行かれたのは脱衣  
所だ。乱暴な仕草でバスタオルをばさりと頭からかぶせら  
れる。

「今すぐ、シャワー浴びてくれる？」

浮かべる笑みは本気で怖い。

今すぐ香りを落とせ、ということらしいと理解した。反  
論や反抗するだけの度胸はなく、はい、とおとなしく従う。

……その日は、失神するまで抱かれる羽目になった。